ポーランドの悲劇

長谷川　修

昨年二月のロシアのウクライナ侵攻から一年になろうとしている。二〇世紀ソ連の犯罪として名前だけは聞いていた「カチンの森事件」について少し調べてみようと、ザスラフスキー著『カチンの森　ポーランド指導階級の抹殺』を繙いた。

事件の概要はこうである。第二次世界大戦の直前一九三九年八月に独ソ不可侵条約が結ばれ、密約でポーランドを東西に分割し、東半分をソ連が占領することとなった。東の軍人二五万人が捕虜となりソ連に連行されたが、このうち将校二万二千人は、ＮＫＶＤ（秘密警察のちのＫＧＢ）によって四〇年春に銃殺され、カチンの森他二ケ所に埋められた。ポーランドの徴兵法では大卒者はすべて予備役将校であったから、殺された中には、教授、医者、弁護士等の知識人も含まれていた。

独ソの蜜月は二〇ケ月で終わり四一年六月に両国は戦闘状態にはいる。モスクワ近くまで攻め込んだ独軍は、四三年三月カチンの森で銃殺遺体四千を発掘したと発表すると、ソ連は独軍の殺害であると反論した。また、英米の首脳は実情を知っていたと思われるが、戦後処理においてソ連の嘘言を黙認した。

ソ連が自らの犯罪を認めたのはゴルバチョフ大統領時代で、事件から五〇年後のソ連邦崩壊寸前だった。ポーランドはカチン以外で殺害された将校や連行された兵士の調査を求めたが、プーチン大統領は二〇〇五年に「ソ連のスターリニズムによる犯罪で、現在のロシアとは関係がない」と一方的に調査を打ち切った。

反ソ・レジスタント運動を描いて世界の若者に人気のあった映画監督のアンジェイ・ワイダは、父を「カチンの森事件」で亡くし、八〇歳で同事件を題材に『カティンの森』を制作した。

ポーランドは周りの強大国の膨張主義に翻弄されてきたが、他方虐げられた人々には寛容だ。ナチ・ドイツのホロコースト以前にはユダヤ人が三五〇万人住んでいたし、今回のウクライナ侵攻で、国外に逃れた住民四二〇万人のうち二五〇万人を受け入れている。